

保幼小の連携教育のカリキュラム作成に関する研究

南国市立日章小学校 教諭 尊田 史
高知県教育センター チーフ 尾中 映里

保育所・幼稚園と小学校の接続期において、幼児教育から小学校教育への接続に様々な課題がある。小学校の新学習指導要領には、幼児教育との連携やスタートカリキュラムについて新たに明記され、来年度からは完全実施される。そこで、本研究では、円滑な接続につながる「合科的な学習を取り入れたスタートカリキュラム」と「保育所・幼稚園と小学校の交流活動を位置付けた年間指導計画」の作成に取り組み、検証授業を行った。検証授業では、スタートカリキュラムにおける合科的な学習プログラムの有効性や効果的な交流活動の在り方を抽出児童の変容等から授業分析し、検証を行った。さらに、アンケート調査結果を含めて、保幼小の円滑な接続の在り方を考察した。

キーワード：保幼小連携、スタートカリキュラム、合科的な学習、交流活動、互惠性

1 はじめに

今日、小1プロブレムなど小学校入学当初の児童の学校への不適応が問題になっている。小1プロブレムの原因として、子どもの姿が変わってきたことや社会環境の変化など、様々なことが考えられるが、その一つに遊びや環境を通して総合的に学ぶ幼児教育から教科の学習が中心である小学校教育への移行がスムーズに行われていないという実態がある。

また、平成 21 年度の全国学力・学習状況調査結果から本県の学力の状況を見てみると、小学校国語については全国の平均正答率とほぼ同じ、算数についてはやや低い結果となっている。学力の向上は、高知県の教育課題の中でも最重要課題である。学力については、学習に対する関心・意欲・態度との相関関係も指摘されている。将来の学力の基礎を培う幼児期から小学校第1学年において、児童が主体的に学び、進んで学習に取り組めるカリキュラムを作成・実施していけば、将来につながる学ぶ意欲を育てることができるのではないかと考えた。

平成 23 年度から完全実施となる新小学校学習指導要領にも、「特に第1学年入学当初における生活科を中心とした合科的な指導については、新入生が、幼児教育から小学校教育へと円滑に移行することに資するものであり、幼児教育との連携の観点から工夫することが望まれる」など、幼児教育との連携や合科的・関連的な指導の推進、第1学年入学当初のスタートカリキュラム等の必要性が述べられている。

これまで、多くの小学校で保育所や幼稚園との交流活動や授業参観、教員同士の合同研修会、学校間の連絡会などが行われてきた。今後は、人と人とのつながりだけでなく、学びや育ちの連続性という視点に基づいた教育課程や内容のつながりも必要である。

そこで、保育所や幼稚園で行われてきた「遊びを通して総合的に学ぶ」ような指導方法や形態を小学校第1学年の学習に取り入れ、工夫されたカリキュラムを作成・実施すれば、円滑な接続を図ることが可能になると考えた。児童にとって円滑な接続とは、1年生児童が無理なく小学校の生活や教科の学習に慣れていき、「明日も学校に来たい」という意欲を持ったり、「1年生になっていろいろなことができるようになった」と自信を持って学校生活を送ったりすることであろう。また、学校や学級に自分の居場所があり、安心して学習に取り組むことができる環境をつくることで、「学校は楽しいところ」「勉強はおもしろい」「友達といると楽しい」と思え、そのことが学習意欲の基礎となり、将来の学力の基盤となると考えた。そして、小学校卒業時まで、学習や生活において自分の思いや願いを持って取り組むことができる、自分や友達のよさに気づき自尊感情を持つことができるなど、育てたい子ども像を設定し、研究を進めることにした。

2 研究目的

平成22年11月11日に「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)」では、幼小接続の重要性について、「子どもの発達や学びの連続性を保障するため、幼児期の教育と児童期の教育が円滑に接続し、体系的な教育が組織的に行われることが重要」と述べられている。幼小接続の重要性は十分認識され、明らかとなっているが、幼小接続の取組が十分に実施されているとはいえないのが現状である。

そこで、本研究では、今日的課題や高知県の教育課題、新学習指導要領等を踏まえ、「総合的な学習を行うスタートカリキュラム」や「保育所・幼稚園と小学校の交流活動を位置付けた年間指導計画」を作成し、実施すれば、保育所・幼稚園と小学校の接続がスムーズになり、児童にとって円滑な接続が図れるだろうと考え、以下のように仮説を立てた。

【研究仮説】

保幼小連携の時期を早い段階から設定し、交流活動を深め、遊びを通して総合的に学ぶ幼児教育を教科等の学習を中心とした小学校教育に生かすような第1学年の年間指導計画やスタートカリキュラムを作成・実施することで、保幼小間の円滑な接続を図ることが可能となる。

3 研究内容

(1) 基礎研究

ア 保幼小の接続期における現状と課題について

先行文献等から保幼小の接続期の現状と課題について整理し、今日的課題として研究構想図の中に位置付けた。

(イ) 接続期の現状

a 児童・幼児

児童・幼児に見られる課題として基本的な生活習慣の欠如、生活体験や遊びの不足、コミュニケーション能力の不足、学習への関心・意欲の低下、環境の変化などに対する適応力低下などが考えられる。

b 教師・保育者

保育所・幼稚園と小学校の教育システムや指導方法の違いへの理解が不十分、教師の多忙感などが考えられる。

c 保護者・社会環境

家庭や地域社会の教育力の低下、少子化や核家族化に伴う人間関係の希薄化、情報の氾濫や遊びの変化、入学前の不安感などが考えられる。

(ロ) 接続期の課題

上記の現状を受けて、新学習指導要領の基となった中央教育審議会の答申(平成20年1月)

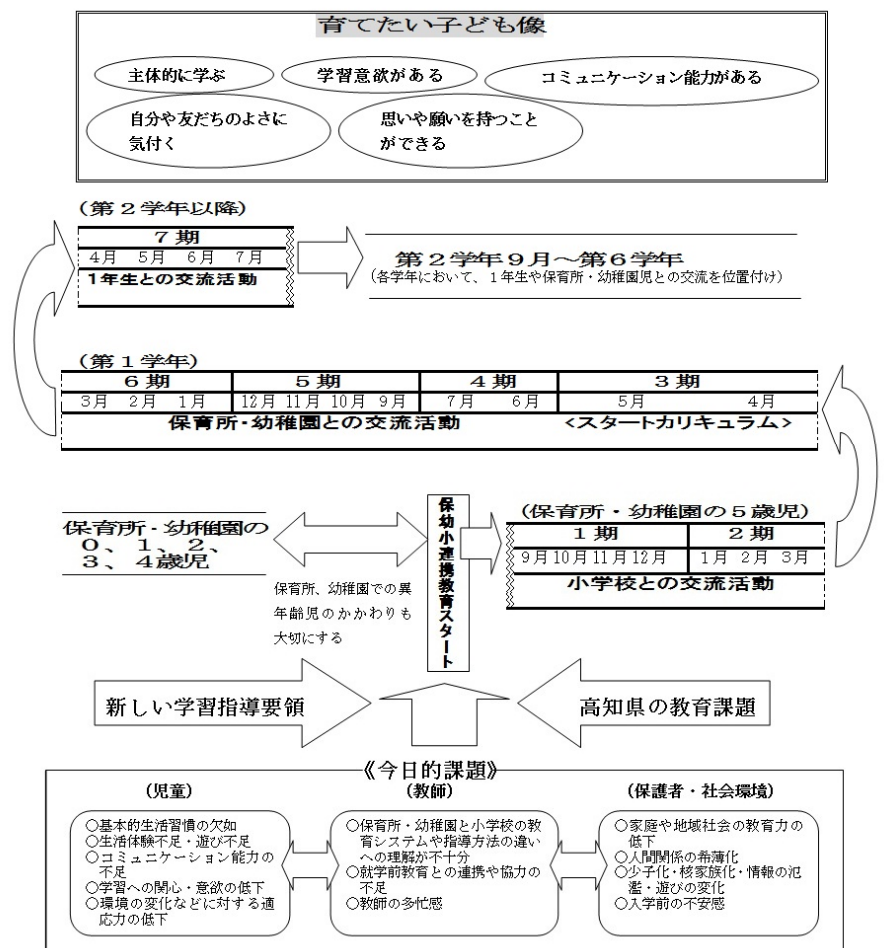


図1 研究構想図

にも、「小1プロブレムなど、学校生活への適応を図ることが難しい児童の実態があることを受け、幼児教育と小学校教育との具体的な連携を図ること」と接続期の課題が挙げられている。こうした課題を受けて、『小学校学習指導要領解説 生活編』（平成20年8月）には、「幼児教育から小学校教育への円滑な接続を図る観点から入学当初をはじめとして、生活科が中心的な役割を担いつつ、他教科等においても、生活科と関連する内容を取り扱ったりする合科的・関連的な指導の一層の充実を図る」と、改善の具体的事項が示された。これは、スタートカリキュラムの基本的な考え方である。また、これに続いて「児童が自らの成長を実感できるよう幼児と一緒に学習活動を行うことなどに配慮するとともに、教師の相互交流を通じて、指導内容や指導方法について理解を深めることも重要である」と、連携・交流の重要性が示された。

イ 第1学年のスタートカリキュラムと合科的な学習について

幼児教育との接続の観点から、幼児と触れ合うなどの交流活動や他教科等との関連を図る指導は引き続き重要であり、特に、学校生活への適応が図られるよう、合科的な指導を行うなどの工夫により第1学年入学当初のカリキュラムをスタートカリキュラムとして改善することとした。『小学校学習指導要領解説 生活編』（平成20年8月）

スタートカリキュラムとは、保育所や幼稚園から小学校へ入学した子どもたちが、小学校の生活や学習にスムーズに適応していくことができるよう編成されたカリキュラムである。具体的には、小学校入学時の数ヶ月、1年生が幼児期に経験してきた「遊びを通して総合的に学ぶ」指導方法や指導形態を小学校の教科の学習に取り入れ、複数の教科の目標や内容を組み合わせた学習の時間を設定した合科的な学習プログラムを取り入れたカリキュラムである。

国語科、音楽科、図画工作科など他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにすること。特に、第1学年入学当初においては、生活科を中心とした合科的な指導を行うなどの工夫をすること。『小学校学習指導要領解説 生活編』（平成20年8月）

合科的な指導とは、「各教科のねらいをより効果的に実現するための指導方法の一つで、単元または1コマの時間の中で、複数の教科の目標や内容を組み合わせて学習活動を展開するもの」である。

(2) 調査研究

ア アンケート調査（平成21年度・22年度に1年生を担当した経験のある小学校の教員及び年長児を担当した経験の保育者対象の、入学前後の児童の実態や保幼小の交流活動に関するアンケートの実施・結果集計・考察）※アンケート全結果及び考察は別添資料

(ア) 対象市町村及び回答数

対象市町村及び回答数は、以下の通りである。（実施時期：7月中旬～8月下旬）

	A市	B市	C市	D町	E町	F市	合計
保育士・幼稚園教諭	17名	26名	41名	25名	23名	37名	169名
小学校教諭	11名	19名	26名	19名	10名	43名	128名

(イ) 保育士・幼稚園教諭対象のアンケート結果と小学校教諭対象のアンケート結果及び考察

a 基本的な生活習慣と話を聞くことについて

小学校教諭対象のアンケートの「1 1年生を担当されて、入学当初から1学期の終わり頃まで、学級や児童の様子で気になったことや指導上困ったことがありましたか」という質問に対して、以下のような結果が得られた。

1. 基本的な生活習慣が身に付いていない児童が多い 46.1%
2. 指示が通らない、話が聞けないなど一斉指導が難しい 43.0%

そして、小学校教諭対象のアンケートの「2 入学前に児童にどのような力を付けておいて欲しいと保育所や幼稚園の先生に望みますか」という質問に対して、基本的な生活習慣に関するこ

とや話を聞くことに関することが多く出されていた。一方、保育所・幼稚園教諭対象のアンケートの「1 小学校に入学するまでに、保育所・幼稚園ではどのようなことを目標に幼児を育てていますか」という質問に対しては、以下のような結果が得られた。

- | | |
|--------------------|-------|
| 1. 人の話が聞ける | 98.2% |
| 1. 自分の思いや願いを出せる | 98.2% |
| 3. 基本的生活習慣が身に付いている | 97.6% |

入学当初、小学校教諭は基本的生活習慣が身に付いていない、話を聞くことができないと感じ、そのような力を付けることを望んでいるが、保育士・幼稚園教諭はこの2点についてほぼ全ての保育所・幼稚園で目標にあげ、保育を行っていることが分かった。

b 交流活動について

保育士・幼稚園教諭対象及び小学校教諭対象の両方のアンケートで、「3 ②保幼小の連携・交流を進めていく上で、支障となっていることはありますか」という質問に対して、以下のような結果が得られた。

	保育士・幼稚園教諭	小学校教諭
ある	43.2%	39.8%
ない	46.7%	57.8%
回答なし	10.1%	2.3%

表1 連携・交流についての考えの比較①

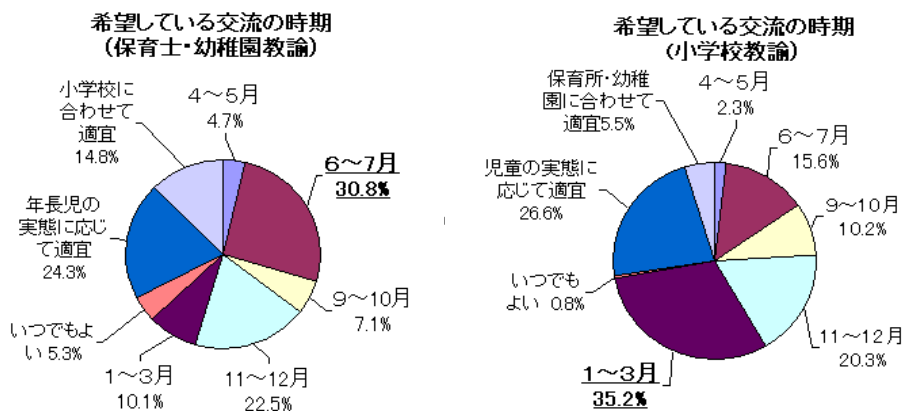
また、「3 ③どんなことが支障となっていますか」という質問に対しては、以下のような結果が得られた。

	保育士・幼稚園教諭	小学校教諭
1	小学校側の時間の確保が難しい 17.2%	双方の打ち合わせに時間が取れない 21.1%
2	双方の交流活動に対する共通理解が不十分である 16.0%	小学校側の時間の確保が難しい 20.3%
3	保育所・幼稚園側の時間の確保が難しい 14.8%	保育所・幼稚園側の時間の確保が難しい 10.9%

表2 連携・交流についての考えの比較②

どちらのアンケートでも時間に関することが多くなっているが、保育士・幼稚園教諭対象のアンケートでは、「双方の交流活動に対する共通理解が不十分である」の回答が2番目に多いことが特徴であった。

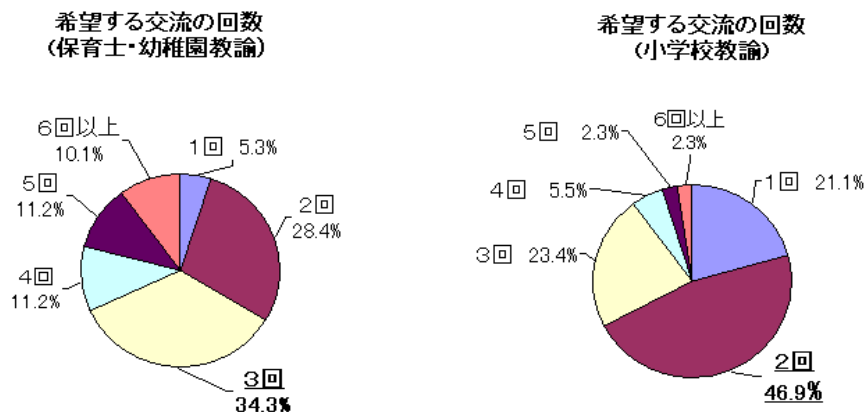
c 希望している交流の時期について



グラフ1 希望している交流の時期の比較

希望している交流の時期は、保育士・幼稚園教諭は6～7月が1番多く、小学校教諭は1～3月が1番多かった。保育士・幼稚園教諭は早い時期から交流を始めることを望んでいるが、小学校教諭は遅い時期でよいと考えているようである。ここに双方の交流への意識の違いが見られた。

d 希望している交流の回数



グラフ2 希望している交流の回数の比較

希望している交流の回数は、保育士・幼稚園教諭は3回が1番多く、小学校教諭は2回が1番多かった。また、4回～6回以上の交流に○を付けた保育士・幼稚園教諭が3割以上いるのに対して、小学校教諭は1割程度と少なくなっている。これらのことから、保育士・幼稚園教諭の方が小学校教諭より多くの交流を望んでいることが分かった。

e 希望する交流の内容について

保育士・幼稚園教諭		小学校教諭	
1. 行事の時の交流	78.1%	1. 行事の時の交流	82.0%
1. 1年生の生活科の内容	78.1%	2. 1年生の生活科の内容	78.9%
3. 保育所・幼稚園で経験したことがある遊びを取り入れたもの	66.3%	3. 保育所・幼稚園で経験したことがある遊びを取り入れたもの	44.5%

表3 希望する交流の内容の比較

交流の内容として希望する内容は、どちらも「行事の時の交流」と「1年生の生活科の内容」が多かった。また、「保育所・幼稚園で経験したことがある遊びを取り入れたもの」に○を付けている保育士・幼稚園教諭も多く見られた。これから交流を進めていく際、保育所・幼稚園の教育内容を理解し、互惠性のある交流活動にするためにも、小学校側も積極的にそのような内容を取り入れていく必要もあると考えた。

イ 基礎研究及びアンケート調査に基づいた第1学年スタートカリキュラム及び交流活動の指導計画の作成

(ア) 第1学年スタートカリキュラム ※別紙資料1

(イ) 交流活動についての第1学年生活科単元計画及び指導案 ※別紙資料2

(3) 実践研究

ア 研究授業（作成した第1学年スタートカリキュラムの単元を実施：A小学校第1学年）

(ア) 研究授業を実施した単元について

<単元名> 「みんななかよし (第3期) 14時間」
 <目標> いろいろなものや人と仲良くなり、新しい出会いを楽しみながら、生き生きと過ごすことができる。
 <ねらい> 学級や学年の友達と遊んだり、集会をしたりしてさらに仲良くなり、いろいろな友達と楽しく活動することができる。

小学校入学から約1ヵ月半経ったこの時期は、先生や学級の友達や小学校という新しい環境にも慣れてきており、これからさらにいろいろな人や物との関わりを広げたり、深めたりする時期であるため、このような目標やねらいを設定した。また、児童は少しずつ小学校の授業にも慣れてきているところであるため、スタートカリキュラムにおける合科的な学習の時間を少なくし、教科の時間を多く設定した。さらに、教科書の目標や内容から合科的に扱うのに適していると思われる単元を洗い出し、整理、統合していった。

(イ) 研究授業を実施した小単元について

〈小単元名〉「どうぶつらんどへようこそⅠ～Ⅳ」(5時間)

- 〈ねらい〉・動物の出てくる歌を歌うことを楽しんだり、好きな動物のことを友だちに知らせたり聞いたりして、話すことに慣れる。[国語][音楽](研究授業①)
- ・仲良し作りをしながら数に親しんだり、動物バスケットをして友だちと楽しく活動したりすることができる。[算数][学活](研究授業②)
 - ・動物の特徴を捉えながら、歌ったり踊ったりすることを楽しむ。[音楽][体育]
 - ・お気に入りの動物をいろいろな紙を使って絵に表すことを楽しんだり、絵に表したことを友だちや先生に伝えたりすることができる。[国語][図画工作](研究授業③)

5月中旬から下旬にかけて教科書が取り上げている学習内容を見てみると、動物を扱ったものが多く、そのつながりで小単元を構成した。設定した単元の目標やねらいと教科の目標や内容に関連させながら、授業を構成した。動物は保育所や幼稚園で馴染みのある事柄であり、児童にとって親しみやすいのではないかと考えた。動物という一つの大きなテーマを設定し、その中に各教科の学習内容を組み合わせ、合科的な学習の時間にした。動物をテーマにしたこの小単元を通して、楽しみながら学習したり、友達と関わりながら学習したりする児童の姿をイメージした。また、新しい提案として、合科的な学習の時間は生活科を中心としたものが多いが、ねらいにふさわしければ、本小単元のように他教科等の組み合わせもできると考え、授業を構成した。遊びと活動を中心としながら、いろいろな内容が繋がって盛り込まれた授業内容にした。目標やねらいは、「慣れる」「親しむ」「楽しむ」など、到達目標が緩やかなものにし、児童一人一人の内面の育ちを大切にするようにした。評価についても、同様に技能的な項目よりも、関心・意欲・態度の項目を多く取り入れ、児童の将来的な伸びにつながる「学習意欲」に重点を置いた。

(ウ) スタートカリキュラムにおける合科的な学習プログラムの有効性について

a 有効性を検証するにあたって

スタートカリキュラムにおける合科的学習が、児童の円滑な接続にとって有効なものであるかを、児童の変容から考察していった。

学校生活にスムーズに適応していないと思われる児童(抽出児童A・B)だけでなく、適応していると思われる児童(抽出児童C・D)についても考察を行った。また、スタートカリキュラムは、小学校の生活や学習にスムーズに適応していない児童だけでなく、全ての児童が学習や生活に意欲的に取り組むことができるようになるものであると考え、おおむね適応していると思われるが、課題の見られる児童(抽出児童E・F)や学級全体の様子についても変容を見ていった。

b 抽出児童の分析・考察

児童の変容 抽出児童等	児童の実態	授業中・授業後の様子 (研究授業①②③)
抽出児童A		<p>(研究授業②) 本授業でも、友達に言われたことで拗ねてしまい、授業に参加しない場面があった。しかし、みんなが楽しそうに活動していると、自分からゲームに参加し、その後はみんなと一緒に楽しく活動できていた。</p>
抽出児童B		<p>(研究授業①) 知っている曲を発表する場面では、進んで挙手し、発表できた。友達と会話をしてシールをもらう場面では、多くの友達に自分から話しかけることができていた。また、振り返りの場面でも進んで挙手し、今日の学習が楽しかったと言っていた。</p>
抽出児童C		<p>(研究授業①②③) どんな活動にも意欲的に取り組むことができていた。教師が指示しなくても、自分で工夫しながら学習を進めたり、困っている友達に優しく教えたりしている様子も見られた。</p>
抽出児童D		<p>(研究授業②) どんな活動にも真面目に取り組むことができていた。しっかりしており、どちらかといえば大人しいが、フルーツバスケットのゲームでは、鬼になったり、笑ったり、生き生きと活動する様子が見られた。</p>
抽出児童E		<p>(研究授業①) どの活動にも集中していることが多かった。友達と会話をしてシールをもらう活動に真剣に取り組み、休み時間になっても「もっとやりたい」「全部シールを貼りたい」と目標を持って意欲的に活動している様子が見られた。</p> <p>(研究授業③) また、動物の絵をつくる活動にも飽きることなく没頭している様子が見られた。自分の作品に対する思いを十分表現することができていた。</p>
抽出児童F		<p>(研究授業①②③) 担任の話や事前の児童観察から、やりたくないことはやらないことがある児童であると理解していたが、どの活動にも積極的に取り組んでいた。</p> <p>数のゲームでは、数の合成と分解を楽しみながら理解していた。特に困る様子もなく、スムーズにできていた。</p>
その他(学級の様子等)	<p>学級全体としては比較的落ち着いていると思われる。児童一人一人は明るく素直な児童が多い。しかし、抽出児童A～F以外に学習面や生活面で課題のある児童もおり、変容を見ていく必要があると思われる。</p>	<p>(研究授業①②③) 学習面で課題のある児童が2～3名、生活面で課題のある児童が2～3名(幼い・授業に集中できない)いたが、みんな生き生きと授業に参加できていた。</p> <p>学級全体の様子としては、少し騒がしくなっても、「話を聞く」「きまりを守る」などのけじめをつけることができていた。活動の時間が長くなっても、集中して活動することができていた。</p>

(エ) 考察

抽出児童や学級の様子から、合科的な学習が有効であると検証できたことは以下の点である。

- a いろいろな学習活動を経験しながら、自分の思いや願いを表現する喜びや楽しさを感じることができた。
- b 教科・領域それぞれに学習するよりも時間にゆとりがあり、児童の学習に対する意欲をつなげたり、小学校の学習に対する満足感や達成感を持たせたりすることができた。
- c 児童が主体的に取り組める課題や活動であったので、児童が活動に集中することができた。
- d スムーズに適応できていない児童だけでなく、適応できている児童もより意欲的に活動したり、友達に積極的にかかわったりすることができた。

合科的な学習は、保育所や幼稚園で経験した活動と重なる内容のものもあるが、誰もが課題や活動の仕方を理解でき、意欲的に授業に参加できることが大切である。接続期にあたる1年生の入学当初においては、保育所・幼稚園で学んだ内容と重複したり、同じような学習内容を繰り返し学んだりしながら一人一人の学びが確かなものになっていく。今回の研究授業では、どの授業も児童が生き生きと活動することができていた。1年生のそのような姿こそが、スタートカリキュラム第3期の目標であり、合科的な学習のねらいであった。

イ 検証授業（交流活動の指導計画の中の1単元を実施：A小学校 第1学年、B保育所 年長児）

(ア) 交流の学年、交流の相手のクラス（年長児・年中児・年少児）、回数、時期、内容について

現在、各小学校で様々なスタイルで交流活動が行われている。交流活動をより充実させ、効果的な交流活動を行っていくことは、今後、保幼小の連携教育を進めていく上で必要不可欠である。効果的な要素を取り入れ、児童や幼児の実態に合った交流活動を計画・実施することが保幼小の円滑な接続につながるだろうと考え、以下の要素を取り入れ、検証授業を行った。

a 交流の学年・クラスの組み合わせ

今回は、保育所・幼稚園と小学校の接続期にあたる、第1学年と年長児（5歳児）の学年のクラスで交流を行った。この組み合わせで行う理由は、以下(a)～(d)である。

- (a) 次年度には新1年生と新2年生になるため、交流しておくことで、新1年生の安心感につながる。
- (b) 年長児は1年生とかかわることで、1年生に憧れや親しみを持ち、もうすぐ1年生になる自分をイメージすることができる。
- (c) 昨年度は年長児と年中児の関係であったので、知っている園児や児童も多く、親しみが持ちやすい。年齢が近いので同じ活動ができ、それぞれに目標やねらいを持って活動に取り組めるので、互惠性のある活動がしやすい。
- (d) 1年生は小学校では1番下の学年であるが、年長児とかかわることで、昨年の自分を思い出し、成長感を感じることができる。

b 交流の回数、時期

交流の回数、時期は以下のことから、1年間に3回(9月、11月、2月)に行うこととした。

(a) 回数

- 実施したアンケートの結果から、1年間に小学校教諭は2回、保育士・幼稚園教諭は3回の交流の希望が最も多いことが分かった。しかし、小学校教諭は3回の希望も2番目に多かった。双方の結果を取り入れ、1年間に3回の交流活動を行うことにした。
- イベント的な行事の交流だけでなく、継続して交流を行うことが大切であると考え、3回なら継続した交流ができると考えた。
- 現在、多くの小学校で1日入学での交流が行われている。そこで、1日入学を含めて3回の交流活動であれば、無理なく実施していくことが可能であると考えた。

(b) 開始時期と実施時期

- 回数と関連して、開始時期も決まってくる。3回であれば1学期からということも考えられるが、1学期は1年生児童がようやく小学校に慣れてきたころである。そのため、交流を行うには少し早いのではないかと考えた。
- 交流活動にあたっては、保育所・幼稚園と小学校が打ち合わせを十分に行う必要が出てくる。初めての交流活動の前には特に、時間をかけて双方が共通理解をしながら内容等を決めていかななくてはならない。お互い1学期は打ち合わせの時間が取りにくいということ、夏休みであれば打ち合わせの時間が確保しやすいことから、交流活動の開始時期は2学期の初めがよいと考えた。
- A小学校では、毎年9月にB保育所の年長児に運動会の招待状を出しているという実態があったことから、運動会の招待状を持っていくことを交流のきっかけとした。
- 9月のスタートからの間隔を考えて、2回目を11月、3回目は多くの学校が2月に1日入学を行っていることからそれを取り入れて、2月に設定した。

c 交流活動の活動形態

交流活動で大切にしたいことは、年長児と1年生のペアを決め、3回の交流活動を通してかわりを深めていくということである。ペアでの活動のよさを以下のように考えた。

- (a) 特定の児童と一緒に活動する中で、コミュニケーションの必然性が出てくる。
- (b) 特定の児童と継続してかわること、年長児全体だけでなく、ペアの年長児に親しみを持つことができる。
- (c) ペアで活動することで、児童一人一人が役割を自覚して行動することができる。

d 交流活動の内容

児童の実態や互惠性、継続性を考え、以下のような内容で3回の交流活動を計画した。

	第1回交流活動(9月)	第2回交流活動(11月)	第3回交流活動(2月…1日入学)
内容	(出会う) ・1年生が保育所を訪問 ・簡単なゲーム、歌 ・運動会の招待 ・ペアで折り紙遊び	(慣れる) ・年長児が小学校を訪問 ・ペアで学校探検 ・ペアでかるた作り ・休み時間一緒に遊ぶ	(深める) ・年長児が小学校を訪問 ・1年生の発表 ・昔遊び(交流で作ったかるた等) ・休み時間に一緒に遊ぶ

(i) 検証授業について

a 検証授業の概要

(a) 対象児童

A小学校 第1学年 44名・B保育所 年長児 30名

(b) 実施日

11月2日・11月11日(保育所との第2回交流活動)・11月15日

(c) 単元名

「2回目のなかよし交流会をしよう」

(d) 交流活動の題材について

B保育所では3学期にかるたを作り、作品展を行うということを保育所との打ち合わせで聞いていた。句などを考えて作るのは保育士が主導をして行っていたようであるので、その部分を1年生が行い、絵札は1年生と年長児が協力して作ればよいのではないかと考えた。1年生にとっては、かるたは生活科の学習で扱う昔遊びや国語の学習とも関連があることである。協力しながら作ることができれば、双方にとって互惠性があるものになり、お互いの年間指導計画に位置付けることができると考えた。かるたのテーマとして

取り上げたのは、学校探検である。学校探検の目的は、小学校入学への期待が高まっていくこの時期、1年生が年長児に学校を案内することで、年長児が小学校を知ることができるということである。また、1年生は自分が気に入っている場所に年長児を案内し紹介することで、自分の学校に愛着を持ったり、年長児とコミュニケーションを取ったりすることができる。そして、学校探検で見たことやしたこと、思ったことをかるたにする活動を一緒に行うことにした。

b 検証授業の分析

(a) 検証授業①②③

	主な活動内容	成果	課題
検証授業① (第1時)	(交流会の事前の授業) ・交流会で年長児としたいことを考える ・年長児を案内したい場所を考えたり、かるたの句を作る練習をしたりする	○年長児としたいことや、案内したい場所などに対して、自分の思いや願いを言うことができた。自分の思いや願いを持つことで、交流活動への意欲が高まった。 ○かるたの句を作ることは初めてであったが、教師の手本を見て「自分も作ってみよう」という気持ちになり、意欲的に句を作っていた。年長児との活動に向けて、新しいことや少し難しいことにも挑戦しようとする姿が見られた。	▲年長児としたいことや案内したい場所をすぐに書けない児童への手立てを工夫する必要があった。
検証授業② (第2・3時)	(保育所との交流会) ・ペアで学校探検をする ・ペアでかるたを作る	○1回目の交流と同じペアの活動を継続することで、ペアの年長児への親しみを持つことができた。 ○ペアでの活動や児童による司会進行をすることにより、コミュニケーション力が高まった。 ○案内した場所やかるたの句から、その子の生活や心を見ることができ、そのことが教師の児童理解につながった。 ○年長児とのかかわりを通して、児童の普段見られない姿や児童のよさを見出すことができ、そのことも教師の児童理解につながった。	▲かるたの句の字が間違っている児童もいたので、かるたの句を考えた後読み札に清書する際、下書き用の紙に1度書いておくとうよかった。 ▲1年生児童が絵札を描くのを手伝うことにしていたが、一人で描きたい年長児もおり、1年生の活動の工夫が必要であった。
検証授業③ (第4時)	(交流会の事後の授業) ・交流会を振り返る ・ペアの年長児に手紙を書く	○振り返りをする中で、自分では気付かなかった自分や友だちのよさに気付くことができた。そのことが、自分や友だちを大切にすることにつながった。 ○年長児のがんばりにも気付くことができた。そのことを年長児への手紙に書いてやるなど、1年生児童の素直な気持ちが見られた。	▲じっくり時間をかけて手紙を書きたい児童もいるので、そのような児童への活動時間を確保する工夫が必要であった。

(b) 学級児童の変容について

児童の変容 抽出児童	児童の実態	検証授業①②③における 授業中・授業後の具体的な様子
抽出児童A		①かるたの句を作る練習では、自分なりに句を考え、進んで教師に見せるなど、意欲的に取り組む姿が見られた。 ②交流活動では、始めの言葉を教師が、「Aさん、やってみる？」と聞いたところ、やろうという気持ちになり、「今日をわくわくしながら待ちました。」と自分の考えた言葉を言うことができた。年長児の前で言えたことは、A児にとって大きな自信になったようである。その後、学習に積極的に取り組む姿が多く見られるようになった。 また、読み札を作るだけでなく、絵札も進んで制作し、自分の仕事を最後まで嫌にならずにやり

		遂げた。
抽出児童B		<p>①ゆっくりではあるが、年長児を案内したい場所や理由も書くことができた。考えるのに時間がかかるが、思いや願いを持つことができるので、児童のペースに合わせて支援すると、かるたの句もじっくりと考えていた。</p> <p>②交流活動では、B児の優しさをたくさん見ることができた。C児と一緒に年長児と話をしながら学校案内をしたり、かるたの色を塗るのを進んで助けたりする姿が見られた。表情がとてもよく、交流の間、ずっとニコニコとして活動することができていた。</p> <p>③ペアの年長児に手紙を書く活動では、取り掛かりに時間はかかったものの、自分で考えながら一生懸命書くことができた。「これからも仲良くしてね。」と自分の気持ちを素直に表現し、次の交流への意欲が感じられた。</p>
抽出児童C		<p>①交流活動でしたいことについて、「かくれんぼがしたい。」と1番に意見を出し、交流したいという気持ちが感じられた。その後も、友だちの出した意見に対して、「散歩した後どうしますか？」と質問をし、年長児との交流について具体的なイメージを持って考えることができていた。</p> <p>②B児と一緒に、年長児と話をしながら学校案内をすることができた。1年生と手をつないだり、いろいろな場所を紹介したりするなど、自分からかわることができていた。</p> <p>③ペアの年長児への手紙に、「僕とBくんでのかるたを仕上げるよ。」と書いており、責任感の強いところが見られた。</p>
抽出児童D		<p>①かるたの句を作る練習では、「よじかんめ おなががぐうと なっちやうよ」という句を1番に考えて発表し、みんなのお手本になった。</p> <p>③交流活動の振り返りでは、「年長さんともっと交流がしたかったです。」と書いており、楽しかったことや、親しみを持てたことを表現できていた。また、ペアの年長児への手紙にも、「また一緒に遊ぼうね。」と次の交流への気持ちが感じられた。</p>
抽出児童E		<p>①交流活動でしたいことについては、「散歩に行って、秋のものを拾ってきて一緒に何か作りたい。」など、具体的なイメージを持って、自分の意見を言うことができていた。そのことだけでなく、一緒に遊びたいなど、交流したいという意欲が感じられた。</p> <p>②交流活動では、自分のお気に入りの場所である運動場に年長児を案内し、一緒に遊ぶなど、積極的にかわりが持っていた。また、かるたの制作では年長児に遊具の描き方をアドバイスしたり、色を塗るのを手伝ったりするなど、優しく接することができていた。</p> <p>③ペアの年長児への手紙に、「もっと遊びたかったけど少ししか遊べなくてごめんね。」「絵が上手でびっくりしたよ。」と素直な気持ちを表現する</p>

		<p>ことができていた。</p>
抽出児童 F		<p>②交流活動では、自分のお気に入りの場所である体育館に年長児を案内し、体育館について紹介したり、一緒にボールで遊んだりできていた。学校探検のときには、年長児と手をつないで仲良く行くことができていた。</p> <p>また、終わりの言葉を言うのを自分からしたいと言い、「私は、保育の人と体育館へ行ってボールを叩いたりして楽しかったです。」と自分の感想を言うことができた。</p> <p>③ペアの年長児への手紙では、「ボールをがんばって描いていましたね。絵を塗る所が上手でした。」と年長児のがんばりを具体的に褒めることができていた。</p>
その他(学級の様子等)	<p>学級全体としては比較的落ち着いていると思われる。児童一人一人は明るく素直な児童が多い。しかし、学習面や生活面で課題のある児童もあり、入学時には変容を見ていく必要があると思われた。</p> <p>2学期以降は、1年生も学校に慣れ、学級や学年全体が落ち着いて生活することができている。しかし、学習理解に時間がかかる児童や自分の思いや考えが言えない児童、学習や生活に消極的な児童もあり、個別に配慮が必要な児童もいる。</p>	<p>①「交流活動で年長さんとどんなことがしたいですか。」と聞くと、「かくれんぼ」、「おにごっこ」、「なわとび」、「ドッジボール」、「なぞなぞ」、「クイズ」、「だるまさんがころんだ」、「サッカー」、「折り紙」、「散歩して秋のものを絵に描く」など、10の意見が出た。このことから、児童が年長児と交流をしたいという気持ちが十分に感じられた。</p> <p>また、かるたの句を作る練習では、初めてかるたの句を考えたが、児童なりに、一所懸命考えていた。少し難しいことでも、新しいことに挑戦しようという意欲が見られた。</p> <p>②交流活動では、抽出児童だけでなくいろいろな児童のよさが見えた。例えば、普段はあまり目立たないG児が、年長児に進んでいろいろな教室のことを教えたり、学級では幼い児童が、しっかりと年長児が絵を描くのを手伝ったり、トイレに連れて行ってやったりするなどの場面が見られた。学級全体としては、学校案内も、かるた作りも、年長児のことを考えながら、活動することができていた。</p> <p>また、司会・進行を児童が中心になってしたこと、いろいろな児童の活躍の場があった。</p> <p>③DVDで交流活動を振り返ながら、自分たちでよかったことを確認した。全員が、とても意欲的に授業に参加し、自分で気付かなかった自分や友達の良いことに気付くことができていた。</p> <p>ペアの年長児へ手紙を書く活動では、「絵が上手だったね。」などと年長児を具体的に褒めたり、「また一緒に遊ぼうね。」と親しみを感じている言葉があったり、児童一人一人がその子らしい気持ちを表現することができていた。</p>

交流活動やその前後の授業では、どの児童も自分のよさを発揮することができていた。児童は、やりたいことがあれば、活動に対して自然と意欲を持って取り組むことができる。例えば、「年長さんと交流したい」という気持ちがあれば、準備を進んで行ったり、相手に優しくしたり、相手のことを考えて行動したりするなど、相手意識が生まれる。「思いを伝えよう」という気持ちがあれば、自分の気持ちを素直に話したり、書いたりすることができる。自分たちが褒められれば、相手のことも褒めてあげようという気持ちになる。

大切なのは、そのような気持ちになるように、教師がどう持っていかである。教師主導で児童に何かをさせることは、教師ならば可能である。しかし、その活動に児童も思いが込められることは少ないのではないだろうか。教師主導ではなく、児童の思いや願いが実現するよう、活動や体験を充実させる支援をしていくことが大切である。

実施した交流活動は、幼児とかかわることの楽しさを実感できる有効な機会であり、そのことにより、個々の児童のよりよい変容に大きな効果があるものであったと考える。

(c) 年長児について

保幼小間の円滑な接続を図るには、スタートカリキュラムから取組を始めるのではなく、年長児からの取組が大切であると考えた。3回の交流活動を経験することで、年長児の変容が多く見られた。保育所の園長・年長児担任からの聞き取りした内容は以下の通りである。

- 小学校に行くことを不安に思っていた児童もいたが、交流後は不安がなくなっていた。
- かるたを作ったことにより、かるた遊びや文字に自然と興味が出てきた。
- 小学校児童や先生に親しみをもち、行事の時など話しかける子が多くなった。



図2 かるた(年長児の描いた絵札)

昨年度までは年に1回、2月の1日入学での交流のみであったが、今年度は、2学期に2回の交流を行うことができた。このように、早い時期から交流をしていくことで、多くの成果を得ることができた。2回の交流をしているので、3回目の交流である2月の1日入学での年長児の姿や、今後小学校に入学するまでの姿も変わってくることが期待される。また、継続して1年生と交流活動を行ってきた年長児は、小学校入学後にどのような姿が見られるのかを見ていきたい。

(d) 1年生児童全体について

交流活動を経験することで、授業後にも1年生の変容が多く見られた。1年生担任から聞き取りした内容は、以下の通りである。

- 交流活動の後、学校や学級のいろいろな場面で、1年生が自分の役割に責任感や使命感を持って行動しようとする姿が見られた。
- 年長児とのかかわりを通して、自分の成長やよさに気付き、自分を大切にする心が育った。また、友だちのよさやがんばりに気付き、友だちを大切にする心も育った。
- B保育所の出身でない児童も年長児や保育所の先生に親しみをもち、行事などで会うと声をかけるようになった。また、保育所に弟妹のいない児童も保育所の行事に行くようになった。

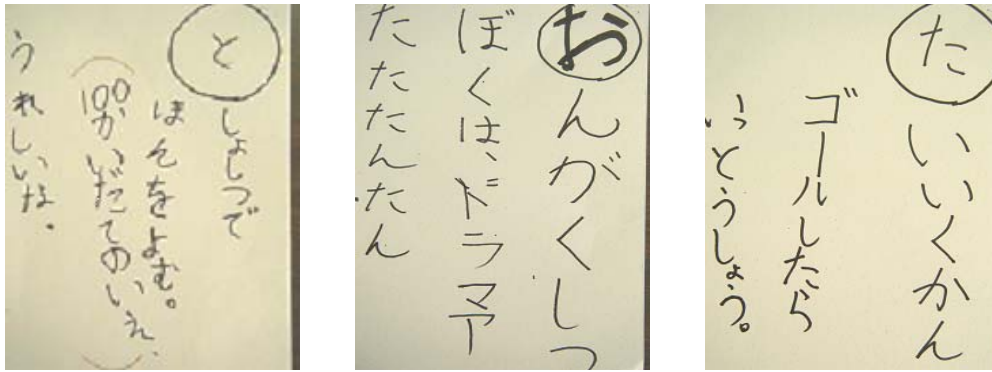


図3 かるた(1年生の書いた読み札)

行事の時にを行うイベント的な交流でなく、保育所と小学校のお互いのねらいを明確にし、生活科の年間指導計画に交流活動を位置付けることにより、1年生児童にこのような力を付けることができた。2学期に2回の交流活動を行い、気持ちが継続できたことや、交流活動の内容の工夫によるものも大きいと考える。これまでは1日入学での交流のみだった1年生に比べ、継続して交流を行ってきた1年生は、年長児が小学校入学後、新1年生と新2年生になった時、どのようにかかわる姿が見られるかを見ていきたい。

4 研究の成果と課題

(1) アンケート調査について

ア 成果

保幼小の接続期には、児童・教師・保護者等にそれぞれ今日的教育課題があると先行研究でもあげられている。このことについて高知県での現状を把握し、保幼小の円滑な接続に効果的なカリキュラム作成を行うため、保育士・幼稚園教諭と小学校教諭を対象にアンケート調査を行うことができた。

アンケート結果から、児童の基本的な生活習慣や人間関係に関すること、登校渋りなどの問題や、連携を進める上で時間的なことが支障となっているなどの、教師の多忙感も明らかになった。また、保育士・幼稚園教諭と小学校教諭の意識の違い等が見え、スタートカリキュラムや交流活動の指導計画の作成に生かすことができた。

(2) 第1学年のスタートカリキュラムについて

ア 成果

児童は、スタートカリキュラムにおける合科的な学習の中で、いろいろな学習活動を経験し、自分の思いや願いを表現する喜びや楽しさを味わいながら、意欲的に学習に取り組んでいた。また、教師主導でなく児童が主体的に学ぶような授業を行うことで、学習に対する満足感や達成感を持つことができていた。さらに、ゆったりとした時間の中で友だちや先生とかかわる活動を通して、共に学ぶ楽しさやコミュニケーションの楽しさを感じることができていた。

このように、スタートカリキュラムは、小学校生活にスムーズに適応していない児童だけでなく、全ての児童によりよい姿が見られるものであった。このことから、スタートカリキュラムは、保育所・幼稚園から小学校への円滑な接続に有効であったといえる。

イ 課題

新しい小学校学習指導要領にもスタートカリキュラムのことが明記されており、今後はどの学校でも実施されていくものである。今後は児童の側に立った「円滑な接続」を目指し、学びや育ちの連続性の確保をしていくために、学校や学年、児童の実態に合ったスタートカリキュラムを作成し、教職員全体で共通理解を図り、実施していくことが課題である。

(3) 保育所と小学校の交流活動について

ア 成果

1年生児童については、交流活動を通してその児童のよさを発揮することができ、そのことが教師の児童理解にもつながった。また、ペアでの活動では、相手のことを思いやりながら年長児と接することで、コミュニケーションの力が付いた。さらに、年長児とかかわる中で、大きくなった自分の成長を感じ、いろいろなことができるようになった自分を自覚することで自尊感情も育った。年長児にとっては、小学校で1年生と一緒に活動をする事で小学校を知ることができたり、1年生児童や小学校の先生への親近感を持ったりすることができた。

これらの成果が得られたのは、交流活動を継続して行ったこと、交流活動のねらいや目標、内容について保育所と小学校が話し合い、互恵性のある交流活動を計画・実施することができたからである。

イ 課題

これまでも多くの小学校で保育所・幼稚園との交流活動が行われてきているが、年長児と1年生との交流活動は、1日入学での交流が主であった。今後は、互恵性のある交流活動を年間指導計画に位置付け、継続して行っていくことが大切である。年間指導計画に位置付けることにより、1年生担任だけでなく教職員全体の交流活動に対する理解が深まり、連携に対する意識が高まるだろう。そして、連携に対する意識が高まることで、さらに交流活動も充実していくと考えている。

5 終わりに

2月に3回目の交流活動として行われた1日入学。1年生児童に歓迎のメダルをかけてもらうのを待っていた年長児のところへ、校長先生が入って来た。「こうちょうせんせいー！」と駆け寄っていく年長児たち。9月から行ってきた3回の交流活動で、1年生児童にはもちろん、1年生担任や校長先生にもこのように親しみを感じていた年長児たちが、あと1ヶ月ほどで小学校に入学して来る。「例年より、小学校への関心が高まって、みんな入学を楽しみにしています。」と保育所の先生方から聞くことができた。1日入学では、1年生も年長児とすっかり仲良くなり、「早く小学校においで。待ってるよ。」と新1年生の入学を心待ちにしている様子がうかがえた。そして、1日入学を終えて年長児が保育所へ帰るのを見送る時のことである。いつものように1年生児童がアーチを作り、その下を年長児が通り抜けて帰ろうとした時、「グーッデー、グーッバーイ」と、1年生が年長児に手を振りながら歌い始めた。教師が「歌おうか。」といったのではなく、自発的に1年生児童が歌い始めたのである。そこにいる誰もが温かい気持ちになった。この姿こそ、交流活動の成果の全てではないだろうか。年長児は、「こんなお兄ちゃんお姉ちゃんのいる小学校に入学したい」「早く1年生になりたいな」と、入学へ期待を持っていることであろう。そんな1年生が入学し、スタートカリキュラムでさらに、「小学校の勉強っておもしろい」「お友だちもたくさんできて、楽しい」「知ってる2年生がいてよかった」と小学校の学習や生活をスムーズにスタートさせることができるであろう。そして、このように行ってきた連携の成果は、1、2年生の低学年の時だけのものではなく、児童が進級しても、ずっと生きていき、児童の確かな力になるだろう。こうして連携の成果が児童の学習や生活に返っていくことが、児童にとって円滑な接続につながることを考えている。

*掲載物使用承諾済

【参考文献】

- ・篠原孝子 田村学編『幼稚園・保育所と小学校の連携ポイント』ぎょうせい、2009
- ・佐々木宏子『なめらかな幼小の連携教育 ～その実践とモデルカリキュラム～』チャイルド本社、2004
- ・滋賀大学教育学部附属幼稚園『学びをつなぐ 幼小連携から見えてきた幼稚園の学び』明治図書、2004
- ・香川大学附属高松小学校『幼稚園教育と小学校教育との接続に配慮した指導の内容や方法の工夫と改善』、2010
- ・和田信行『小学1年生「わくわくドキドキカリキュラム」』学陽書房、2008
- ・文部科学省 厚生労働省『保育所や幼稚園と小学校における連携事例集』、2009
- ・木下光二『育ちと学びをつなげる幼小連携 ―小学校教頭が幼稚園へ飛び込んだ2年間―』チャイルド本社、2010
- ・小林克己『小1プロブレムを克服する！幼小連携活動プラン』明治図書、2009